

尾崎君の理想とさるゝ所、即ち不生産的なる兵備を出来るだけ縮少し、之を生産的方面及び教育的方面に充當し、以て國利民福を増進せんとする意見には頗る同意である。

併し如何に帝國が獨り之を希望しても周圍の狀況が之に應ずる事を得ざれば、單に希望のみに止つて實行は不可能である。

若しも世界各國が吾々の此希望を體得し、之に共鳴して、眞に正義人道の爲めに永久の平和を保つを得れば、之に越す幸福はない。然りと雖も現今の情況は左様でないのである。

尾崎君は海軍の事は、英米兩國と協定しやう、陸軍の事は國際聯盟に一任しやう、斯う云ふ意見である。

我帝國の國防は、殊に海軍政策は、何れも英米を相手にして定

めたのではない。即ち極東に於ける所の四圍の狀況、帝國の安全を保持する爲めに、必要已むを得ざる最小限にまで之を限定して定めたのである。

自主自立的の國防であつて、英米を對手にすると云ふが如き考へは毛頭ない。

其毛頭ない帝國の海軍の事に關して、當方から例へば三分の一或は五分の一に制限しやうと云ふ事は、恰かも今迄はお前等を敵としてゐたが、今日以後は敵とせず、是で打切るのであると云つた結果を來たしはせぬかと思はる。

又一步進んで彼が申出でに應ずる、即ち日本が現在の三分の一なり、或は五分の一なりに短縮しやうと云ふ其提議に應ずるとし

ても願くは具體的の成案を示して貰ひたい。

元來軍備と云ふものは、着物と同じ物である。寸法が合はなければ、見掛けが悪いのみならず、着ても具合が悪い。

——津野田氏は、着物の比喩を以て巧みに軍備を説くのであつた。——

我國の兵役負擔

——果して軽きか重きか——

——津野田氏は軍備を着衣に比喩して説き進むのであつた——
軍備を縮める事は着物を小さくするやうなものである。寸法が合はざれば、着工合が悪いばかりでなく、帶に短し褌に長して全

く用をなさぬ事がある。如何なる寸法にするか、日本が提唱した場合先方に其寸法の成案を伺ひたいと云はれたら何と答へるか。更に汝が提唱せるものなるを以て、乞ふ隗より始めよ。日本が眞先にやるが好い。然らば我々は其例に倣ふて、制限なり縮少なりすべしと斯く云ふ事になつたとすれば、それは否とは云はれない——無論々々の聲は一部から起る。津野田氏はその聲援に力を得たものらしく、舌に力を入れるのであつた。——

即ち退引ならぬ羽目に陥る事があるかも知れない。更に今一つは望月君から質問があつたが、假りに善意を以て應じ、永久に此協約を遵守し呉るゝとすれば問題なきも、何等かの事情の下に他日之を破るとすれば、尾崎君の言の如く英米の富の力、並に製艦

能率は我國とは比較にならぬ。故に其場合に彼が勝手に軍艦を拵へるとすれば、我は大なる不利を來たす。

是は既に歐洲戰亂に於て實例が存する。即ち亞米利加が歐洲大戰に参加して、僅に一年五箇月間に、六百億の大金を費し、三百五十萬の陸兵を部署し、二百五十萬噸の艦船を造つてゐる。

又英吉利は、八百三十二億圓の金を投じて、戰爭中に俄かに強制徴兵令を執行し、約五百萬の大兵を西部戰場に部署し、横暴極りなき獨逸潜水艇に對して常に艦船を補充して、最後まで海上の優越權を占めた。

斯の如き事は英米の如き、國富み技術の進歩せる國に於ては爲し能ふも、我國に於ては遺憾ながら此英米に比較しては其富其技

術何れも比較にならぬ程劣つてゐる、俗に云ふ貧乏國である。

貧乏國に於ては、平常から遺練をして何時の場合に於ても事に應ずるの準備をなし置く要がある。然らざれば協約を結んで破れた時に救ふべからざる深淵に陥るものである。此點に就ても予は大なる疑惑なき能はず。

次に、陸軍の事は、國際聯盟に任せる事とあるが、國際聯盟は表面成立し居るもの、内要に於ては頗る如何はしきものである。

望月君の言の如く、超國家的威力がない。又之を完全に運用するには、經濟同盟を結び附ける必要があると信ずる。

加之、此國際聯盟を第一に主張せる亞米利加が、眞先に脱退して居る。又全四年三箇月十一日に亘り、約四千億の金力を費し、

約九百萬の人命を損じた此戦争の大張本たる獨逸を除外して居る最後には流血戦が未だ終らざるに思想の戦争が起つてゐる國を除外してゐる。此思想戦の惨害たるや、流血戦の比に非らざる事は予が喋々を要せざる所である。即ち思想戦争の噴火口たる露西亞を抛擲してある。元來ヴェルザイユ平和條約が露西亞を末處分の儘として始末せし事が大なる過ちである。即ち國際聯盟は亞米利加と、獨逸、露西亞を除外してゐる。如何に四十餘國を清掃しても、獨逸なり露西亞が噴火しつゝあれば如何なるや。斯の如き不安なる國際聯盟に帝國陸軍の運命を託する、之は如何なるものであらうか?!

何もそれ程に我國が自屈自卑するの要はない。我國の國防は、

我國自ら行くが好い。

次に我國の負擔は、他國に比して著しく過重なりとの議論であるが、予の調査に依れば、左程我國の負擔は他國に比して過重ではない。

第一戦争前に於て、英米は志願兵制度を執り居りしを以て除外し、獨逸、佛蘭西、伊太利、並に日本等に於て、毎年入營する者即ち兵役の義務を負擔する所の統計を見ると、佛蘭西が最も多くして人口千人に對し百五十人入營する。獨逸は之に亞ぎ人口千人に對し百、伊太利は僅か人口三千五百萬であるが廿五師團の兵を養つてゐる。爲に之も千分の七十五に當る。然るに我國は千分の四半である。

又陸海軍費に對する國民の負擔は、戰爭前即ち大正二年の統計に依ると、英國は一人當り十六圓五十錢、米國は六圓六十錢、佛國は五圓七十錢、日本は僅に三圓四十八錢である。

又戰後即ち昨年の統計にては、英國は五十六圓三十三錢、米國は十六圓七錢、佛國は五十一圓八十六錢、日本は僅かに十一圓七錢である。

之を以て見るも、我國の兵役負擔は決して重くはない。

——津野田氏は、我國の兵役負擔は過重ならずと斷じて、更に論歩を進めた。——

露西亞の現狀

——樂觀を許さずとの説——

——津野田氏は、如何に陸海軍を制限するかてふ問題に入つた。そして結局は無論それを制限する事の不可なりと云ふのであつた。軍備制限の方法は、少くとも陸軍に於ても、海軍に於てもある。先づ陸軍に就いて云へば、第一は、現在の二十一箇師團を十五乃至十六に減少する事、第二は、毎年假りに二十五萬人宛入營するとする、それを十五萬乃至十萬人に削減する事。第三は在營年限の短縮で、今日概ね二箇年を一箇年乃至に一箇年半に切上げる事である。之に就いては各々利害得失がある。

海軍に就いても、第一は大正九年度を以て切上げる事。第二は目下建造中のものの竣工を期として切上げる事。第三は従来全く艦船は造らぬ事假りに造るとするならば、如何なる比例にする。即ち艦船艇の比例は如何にして辻褄を合はせるか。即ち陸軍に於ても海軍に於ても此事は充分考慮して然る後論すべき事と思ふ。然るに之に就いて一言の御説明の無い事は、吾々の遺憾とする所である。

又飛行機、此空軍は今日の陸海軍共に必要缺くべからざる國防の大機關である。英國は之が爲め本年の豫算に二億一千萬圓を、米國は一億二千萬圓を計上し、佛國亦一億二千萬圓を計上してゐる。將來の戦争は先づ空中より始つて、陸上面、海上面の戦争と

なり、愈々行詰つて海中又は地中戦となるのである。然るに此空軍に對し御考慮がないやうである。

我國は地理の關係上、殊に家屋の構造上、空軍に對する防禦は極めて缺點が多い。然るに米國の飛行機は今年度に於て、シヤトルからアラスカに飛び、更に日本若しくは西伯利に飛行する計畫がある。

——津野田氏は、隣國支那の飛行隊の事を始め他の飛行機の事を述べて、所謂空軍なるものは陸海軍以外のものとなるが如く論じて、尾崎氏が此事に何等御考慮を費されぬと繰返へした。——更に氏の論は進んだ。此度は露西亞の事であつた。氏は尾崎氏が露西亞を見るに樂觀的態度を以てしてゐるが樂觀すべきものに

非らずして悲観すべき事のものであると云ふのであつた。——
 何故かと云へば、レニン、トロツキ一の徒は、自己の主義を宣
 傳する爲めに、マホメット以上の惡辣手段を施してゐる。遠き所
 には金錢を、近き所には武力を以てして、手段を擇ばず、八方に
 暴威を逞うしつゝある。

之が爲めに昨年（去年）の夏、波蘭攻撃に失敗するや、新軍隊の編制に
 着手して獨逸より兵器彈藥等を製造する職工約二萬人を雇入れ、
 其他優秀なる佐官級の者數千人を輸入した。

——氏は自ら横道に入ると斷つた上、氏が獨逸に在りし一昨年
 の事、獨逸の有ゆる人と會見した中の一佐官が語りたる獨逸將校
 が露西亞軍隊に加ると云ふ事を述べた末、現に露軍に優秀なる獨

逸將校のある事を擧げた。——

露西亞は波蘭の失敗に鑑みて、歩兵を六十五師團、騎兵を二十
 五師團合計九十師團の大兵を今日編成し準備中である。

此九十師團を準備し居るを以て、雪解を待つて其兵力は波蘭に
 及ぶか、又は高架索、巴爾幹に出づるか、何れにしても何事をか
 なさんとするは争ふ可からざる事實である。

——氏は更に露國の現状より支那の事に及び、支那がレニン、
 トロツキ一の故智に倣ふて國際借款までも踏み倒さうとする有様
 である。露國決して樂觀を許さず支那亦斯の如き物騒な事になつ
 た時であるから日本から進んで軍備制限の提唱の要がないと論じ
 て、左の如き結論をした。——

吾々は斷じて軍國主義を唱へるには非らざるも、極東の平和を維持し、帝國の使命を全うする爲めには、それ相應の最少限の兵力を蓄へて置く事は、是必要缺くべからざる事である。此意味よりして今の機會に軍備制限と云ふ事を日本が進んで、提唱するは反對である。

——政友會側から起る拍手を聴きつゝ津野田氏は降壇す——

共鳴せる傍聽者

——感激せるが如き多くの人——

——國民黨の植原悦次郎氏は、賛成演説をなすべく起つた「簡單でありますから、自席から………」と云つたが、奥議長は「矢

張り討論ですから………」と、氏に登壇を促す。議席からも登壇々々の叫び。植原氏は同志の拍手に送られて壇上に立つた。——

——「歐洲戰亂後の大勢に鑑みまして、世界の文明國が競うて國際的正義と人道の大義に則りまして、國際間の平和を造らんと努力しつゝある事に於きましては、少しの疑問を存する餘地もないと信じて居ります」、劈頭に斯う云つて論を進めて行く植原氏は、其論調、其態度共に堂々たるものであつた。氏は齒切れの好い調子で論を續けた。——

此際に當つて、我國が世界の五大強國の一として、而かも國際聯盟の規約に承諾を與へた其一つの國として、此規約の精神に基づき、世界各國と機會があらば、自動的にせよ、將又受動的にせよ

軍備に對する協定の必要あるてふ事は、少くも時局を達觀し得る者の否定し能はざる所である。

——氏は悠々迫らざる態度を以て説き來ると、拍手は盛に起るのであつた——

勿論英國或は米國と、軍備を協定するとしても、對手者のある事なるを以て、之を如何なる條件に向つて前提を置き、以て協定に當ると云ふ事は、何處の國に於ても能はざる所である。

故に此精神を以て、予等が軍備の協定に努力すると云ふ事を、此場合に國民の代表者として聲明する事は、我國の軍國主義に對する所の疑惑を解き、我國が進んで正義と人道の大本に基きて、世界の平和を樹立する事に努力せんとする事を明かにする意味で

らうと思ふ。

——拍手は又一しきり、ヒヤ〜と共鳴の叫び。氏は咳一咳して更に論を進める——

唯今尾崎君の縷々論述されし點に就いては、全部賛同は出來ぬ併し此提案の精神に基いて、我國が世界に向つて、我國自ら進んでも、或は他國の要求に應じて、軍備に對し協定をなし、世界の平和と人道の爲めに、努力すると云ふ事を、國民の代表者たる吾々が聲明する事は、刻下の急務なりと信する故に、此精神に於て私共は賛意を表するのである。

——降壇と共に拍手は起つた。氏の論は自ら其登壇前に云つた如く簡單ではあつたが、理路整然たるものであつた。——

討論終結の動議は岩崎勳氏から提出され、議長は之を起立に問うて討論は茲に終結した。決議案は記名投票に依り決を執ることになつた。

投票總數三百二十三の中、決議案に賛成せる者は僅かに三十八尾崎氏提出の軍備制限に關する案は破れたのであつた。

午後五時二分散會は宣せられた。

議會から吐き出された千人にも餘る傍聽人の其多くは、尾崎氏の獅子吼に依つて何等か感激せるもの、如く、夕靄に煙る議院を顧みつゝ、家路に就くのであつた。

舌戰の跡

基督と尾崎氏

——賛否投票は反對者なし——

軍備制限の協定は、何れの點より見るも我國に取つては一害なくして百利あるものである。而かも我衆議院は、大にしては世界人類に最大の幸福を與へ、小にしては我國の實力を涵養する此軍備制限協定に關する案を尾崎氏が提出したに拘はらず、唯感情の上よりして否決し去つた。尾崎氏は此衆議院の否決せる事が國民全體の意志でないとなし、各地に於て演說會を催し以て軍備制限

協定の事を提げて、一大獅子吼を試みてゐる。其の第一に演説をしたのは東京帝國大學の緑會であつた。尾崎氏は先づ衆議院で自個の提案が否決せられた顛末から説き起して、衆議院の態度の不眞面目なるを告げた後本論に入つた。此時の論旨は大體に於て衆議院に於て論じた所と同様であるが、衆議院に於て演説した時よりも一層熱心であつた。开は衆議院議員よりも大學生の方が誠意を以て此議論を聴くと見たからであつた、其演説も衆議院に於てせるよりも更に學理的であつた。演説は聴衆に大なる感動を與へたものゝ如く、何れも謹んで之を聴き、氏が演説を終つて降壇せんとするや雷の如き拍手は起つた。唯一人氏の議論に反對であつたのか聲高く「賣國奴!!」と叫んだ者があつた。

尾崎氏は微笑を泛べて賣國奴と叫ぶ聲の起つた方を見やつた。

そして氏は自己の説に對して賛否の投票を乞ふた。

投票の結果は左の如くであつた。

投票總數は二百六十八にして、其中賛成者は二百四十一人反對者は僅に二十七人で、即ち九割弱は賛成者であつて、反對者は一割強に過ぎないのであつた。

次に演説會を開いたのは慶應大學である。此時の氏の演説は愈愈熱が加はつてゐた。傍聴者も帝國大學の演説會に於けるが如く頗る眞面目であつた。

賛否投票の結果、投票總數二千百六十四に對し、賛成は一千九百七十四であつて、反對は百九十、即ち反對は一割に當らぬので

ある。

明治大學に於ても同様の演説を試みて賛否の投票を募つた。結果は賛成五百六十五、反對六十七であつて投票總數六百三十二から見ると反對は一割強に過ぎず、帝大に於けると同じ割合を示してゐる。

早稻田大學に於て行つた氏の演説は聴衆に感動を與へた事は四大學中第一であつたとの事で、聴衆中には涙を流して感激したもののさへあつたとの事である。

演説の終るや拍手は暫時止まなかつたのみか「尾崎先生萬歳」を連呼したもののさへあつた。

賛否投票の結果は投票總數四百八十四の中、反對は百分の五弱

の二十四に過ぎず、九割五分強は賛成の意を表したのであつた。

學生に對する演説は以上四大學で一時打切つて、更に一般社會に向つて軍備制限協定の演説を行ふ事となつた。

其第一は交詢社で次が青年會館であつた。交詢社に於ては社會の上流にある人が殆んど集り、熱心に且つ眞面目なる態度で氏の演説を傾聴した。そして賛否を投票に問ふや、反對者は極めて僅少であつて殆んど全部が軍備制限協定に賛意を表した。

神田青年會館に於けるものも同様であつて、反對者は殆んどなく交詢社と同様の結果であつた。

交詢社と青年會館との投票總數を合すると四百九票であつて、内賛成者は三百八十九、反對十八賛否不明七である。即ち反對者

は僅かに三分強に過ぎないのである。

氏は長驅して大阪、京都、神戸の三ヶ所に於ても同様の問題を提げて演説會を開會した。十數年來政談演説會にして傍聴料を徴する事は稀であるのに、氏の此演説會は傍聴料を徴して猶滿員の盛況を告げ入場を謝絶されて歸へる者も多かつた。

京阪神に於ける演説會の聴衆は殆んど熱狂せるばかりであつた氏が軍備制限協定の必要を説くや一句々に拍手は起り、聴衆の大部分は氏の説に感激し共鳴したのであつた。

賛否投票の結果を検するに京阪神三ヶ所を通じての投票總數三千九十八にして、内反對は僅々百七にして總數の五分にも當らず九割五分以上は賛成を表したのであつた。

それのみか此演説會が開かれて後、京阪地方では熱心に軍備制限協定の必要を説く者が俄かに多くなつた。以て氏の演説が如何に反響が多かつたかを窺知する事が出来る。

氏は名古屋岐阜二ヶ所に於ても亦演説會を開いて軍備制限協定の必要を説き同地方の人士に多大の感動を與へた。

此二ヶ所に於ける投票總數は千五百二十四であつて、此地に於ても反對者は全くないと云つて好い位、僅かに四十一を算せしのみで千四百五十七は賛成、二十六は中立であつた。

下の關に於ける演説會に於ても賛否投票の結果は、同様僅少の反對者を出せしのみにて大多數は賛成者であつた。即ち投票總數は四百九十五にして賛成者は九割二分の四百五十六、反對は八分

弱の三十七に過ぎなかつたのである。

氏は中國の心臓たる岡山に於ても軍備制限協定を呼號した。そして五百二十二の投票總數中反對者は僅々五分強の二十七であつて他は賛成者であつた。

豊橋の演說會に於ても四百二十二の投票總數中極めて少數なる十八人の反對者を見出したのみして、三百七十一人は賛成者であつたのだ。

續いて三河の舉母に於ても演說會を開いて聽衆に軍備制限の可否を問ひ、聽衆中五人の反對者があつただけで、百五十八人は賛成者である事が投票に依つて判明した。

大津に於ける氏の軍備制限協定演說會も盛況であつて、投票總

數二百十五の内、賛成の意を表したのは二百十三人、中立は二名であつて反對者は一名もなかつたのである。

日本寫眞協會に於ける演說會は公開的のものでなく、座談的のものであつたので來會者は二十名であつたが此二十名は氏の説を聞いて何れも膝を直して傾聴し、諄々として説く氏の軍備制限論に全く共鳴し、會衆は及ばずながらも氏の説を他に向つて宣傳すべきを誠意あふる言葉で誓つた。

此時は一人の反對者なく全部が熱心な賛成者であつたのだ。更に永樂俱樂部に催した氏の演說會も座談的のものであつた、會衆は氏の軍備制限協定論が動かすべからざる眞理であるとの深い感念を其心に彫り附けられて、反對の意見を抱くが如きものは

一人もなく、寫眞協會に於ける時の如く、會衆の全部は心から氏の説を聴いて感動し、機會ある毎に他に向つて宣傳する事を誓つた。反對者の如きは勿論一人もなかつたのである。

横濱市の横濱劇場に於て氏が同じ問題で大獅子吼を試みた時の如き、夜間に開會される演説會に對し、聴衆は午後三時頃から劇場の入口に殺到するの有様で、開場定刻の午後五時には定員千餘名に對し六千の人が劇場前に集つた、それが爲め警官及び係員は入場し得ざる人々を賺め歸すに一方ならぬ苦心をした。以て氏の唱ふる所の軍備制限協定論が衆議院に於て否決せられたるに拘はらず、院外に於て如何に多くの共鳴者を有つてゐるか判らう。衆議院は之を否決しても國民の大部分が氏の説を眞理なりと見て

ある事が判らる。

横濱劇場に於ける賛否投票の結果は、他に於ては一割弱内外の反對者を出すのが例のやうになつてゐたに拘はらず、同所に於ては殆んど反對者を出さなかつた。政黨的地盤から見れば横濱市は尾崎氏に取つては最も不利なる所である。然るに氏の演説會を開くや以上の如き盛況を呈し、更に賛否の投票を募るや以上の如き結果を見るに至つたのである。之を以て見れば衆議院以外に於ては氏の説は眞理中の眞理と云ふべく國民の殆んど全部が氏と考へを同うするものであつて、偶々僅少の反對者のあるのは感情に支配される一部に過ぎないのである。

氏は更に全國に向つて大遊説を試み、一日も安きを貪る事がな

い。其演説會を開く毎に聽衆に多大の感動を與へ、軍備制限協定の必要を感せしめてゐる。基督は其教へを説く當初に於ては唯一人であつた。而かも其教義は地球上の全世界に擴大された。尾崎氏の軍備制限協定論も基督が説く教義の如く、唯一人の口から説かれるのであるが、其一人の口から出づる説はそれからそれへと傳へられ、今や海内に遍きのみならず、遠く海を越えて、同じ意見を抱く所の亞米利加の人々に、日本國民が軍備制限協定を欲し居る事を知らしめた。そればかりか軍備制限協定てふ事に未だ熱心ならざる諸外國に對しても其必要を思はしめ、進んで此協定に仲間入りをなさんとの心を起さしめてゐる。

尾崎氏の各地に於て高唱せる軍備制限協定論は斯の如く偉大なる反響あり、獨り我邦の幸福を齎らすのみならず、世界人類に最大幸福を與ふるの因を開いてゐる。尾崎氏の軍備制限協定の提唱はカリパリットに於ける基督の説教に比すべき偉大なるものと云つて好いのである。

尾崎氏の軍備制限協定は既に日本全國に響應してゐるのである而かも熱烈なる氏は之に甘んぜず、猶機會ある毎に各地に遊説し都市と云ふ都市は一つも餘さず演説會を開いて以て其提唱の誤れや否やを賛否投票に依つて訊すと共に、一人にても多く自己の説を注入し、以て世界平和の爲め、人類の幸福の爲めに一大貢獻を致さとしてゐる。

我邦の政治家と云へば、多くは自黨の爲め、若しくは自己の爲

めのみを計るに拘はらず、氏は一切自己を捨て、日本にほんの爲め、世界人類の爲め、東走西馳して席温せきわんまるゝ事なく、各地に演説會を開いて以て軍備制限協定を高唱し居るは、現代政治家として卓越し居る者にして、尾崎氏にして初めて行ひ得る所のものである。世人が尾崎氏を敬服して居る亦故なきにあらず。

「憲政の神」なる語は舊し。各人は尾崎氏に呈するに「基督の再來!! 人類を救ふの神」なる語を以てしたい。

貧しき我國力

|| 年々嵩み行く軍事費 ||

尾崎氏は眞に、國を強うするには總べての力を充實せねばなら

ぬ、徒らに軍備のみを擴張した所が、他の力が之に伴はなければ富國強兵の言葉には充て嵌はままらずして、貧國強兵ひんこくきやうへいになつて了ふ否貧國強兵ではなくて兵のみを強うせんとすれば、所謂軍備倒れとなる結果貧國弱兵とならぬとも限らぬ。

兵力即ち軍備と他の力とは併行して進まねば眞に國を強うする事が出来ないとは、平生説かれてゐる所であつて、尾崎氏の軍備制限協定論は軍備を縮少して國を弱からしめやうとするのではなくて、國家を弾力あらしめ、何れの方面から見ても眞の意味に於ける強い國にしたいからである。此意味から見れば尾崎氏が軍備制限協定論を説くと雖も、事實は軍備擴張論者なのである。國防充實論者なのである。夫を心附かすして唯單に軍備制限てふ四字

のみを見て、尾崎氏を以て國を愛せざるものとなすが如きは淺薄極まる者と云ふべく、殊に智識階級とも云ふべき或一部が尾崎氏の軍備制限協定論を咀嚼し玩味し能はずして、一片の理想論なりと反對しつゝあるは嘆きても餘りあることで、眞の愛國者は尾崎氏の此説に双手を舉げて賛同せざるを得ないのである。

試みに我國力が現在如何なる状態に在るかを見よ。我國力の實際を知らば、無鐵砲とも云ふべき軍備擴張には共鳴し得ざる筈である。我國の現在の國力を以てして此上にも軍備擴張に多額の金を費す事は、恰かも食事を廢して武器を求めると等しいのである。左に我國の國力と他の國の力とを示し以て我國の實際が此上の軍備擴張に巨額を投すべく餘りに貧弱であるかを示めさう。

第一は五大強國の資本である。我日本は二百四十億圓なるに對し英國は六倍強なる一千四百五十億圓である、亞米利加に至つては更に多く約二十倍に近き四千二百億圓てふ巨額である。獨逸は我國の約七倍に當る一千六百五十億圓、衰へたと云はれてゐる伊太利ですら猶我國の二倍弱の四百四十八億圓てふ數字を示してゐる。國民一人當りの資本を見るに我國は四百四十圓なるに對し、亞米利加は約十倍の四千二百四十圓、英國は三千百八十圓、伊太利が千二百八十圓である。

更に所得即ち稼ぎ高を見るに、我國三十二億壹千萬圓なるに對し英國は二百二十五億圓、亞米利加は七百二十五億圓。伊太利ですら八十億圓であつて、比較にも問題にもならないのである。

一人當りの所得から云へば、我國は六十圓、英國は五百圓、米國は七百二十圓、伊太利は二百三十圓である。
 土地利用比率の如きもヒリツマン氏が擧げた統計に依ると左の如きものである。

	面積 <small>千萬坪</small>	耕地 <small>割</small>	森林 <small>割</small>	不毛地 <small>割</small>
日本	一四九	一、五	四、八	二、八
英國	一一一	四、八	〇、六	一、八
米國	二、九七三	一、六	一	一
伊國	一一〇	四、六	一、六	一、三

更に軍事に必要な諸種の生産額を擧げると我國が如何に力弱いかと判かる。(大五六年調査)

	鐵 <small>千噸</small>	鋼 <small>千噸</small>	石油 <small>千噸</small>	石炭 <small>千噸</small>
日本	三九〇	—	二、八九八	二、一九七
英國	九、三三二	九、七二七	—	二一、〇三九
米國	三八、六二一	四五、〇六一	三三五、三一五	五四、二六六
伊太利	四六三	一、三二一	—	—
獨逸	一二、九三一	一六、三二二	九五五	壹二、八二二

數字なるものは最も眞實を語るものである、右の數字を見れば、國民は今迄我國を過信して居たのではないか。五大強國と云ふが、眞の意味から見て強國なりと威張る事が出来るであらうか、這は大に考へざるべからざる所である。

更に日英米諸外國の最近十年間の軍事費を示さう。我國が比較

的如何に軍事費に巨額の支出を爲しつゝあるかが判ると同時に他の國が戦後に於て軍事費の節約を爲しつゝあるかが歴然として數字に現はれてゐる。我國は年を追ふと共に軍事費の支出が増加してゐるのだ即ち左の如し。

◇日本軍事費

大正元年	五九三、五九六 <small>千圓</small>
同 三年	六四八、四二〇
同 七年	一、〇一七、〇三五
同 八年	一、一七二、三二八
同 九年	一、三三五、三五五
同 十年	一、五六二、五四二

尾崎氏は我日本が軍事費に多額の支出をなして惜まざるに反し教育事業に冷淡なるを説いてゐる、依つて参考までに我國の文部省の費用を掲げる事とする。

◇文部省費

大正元年	一一、三〇九 <small>千圓</small>
同 三年	一〇、八〇〇
同 七年	二四、五四六
同 九年	三七、五五七
同 十年	五四、六一〇

世界の主なる國が、戦後に於て如何に軍事費に節約をなしつゝあるかは左の統計が物語つてゐる。

◇英國軍事費

二三〇

大正元年
同 三年
同 七年
同 八年
同 九年
同 十年

一、八四一、五一六千兩
二、〇四二、四九九
二九、七二一、九七〇
一五、九八五、七二六
一一、五五六、三八一

◇亞米利加軍事費

大正元年
同 三年
同 七年

一、三八三、九〇三千兩
一、四七四、五七三
四六、五八五、七五六

同 八年
同 九年
同 十年

一四、五六九、三四二
八、七七三、〇三〇

◇伊太利軍事費

大正元年
同 三年
同 七年
同 八年
同 九年
同 十年

九六八、八五一千兩
二、〇八八、〇一四
一二、六一六、〇〇五
八、二五六、八四七
四、二一〇、九六八

二三一

◇ 獨逸軍事費

二三二

大正元年

一、三七九、五七三千円

同 三年

一、六七二、〇一一

同 七年

二六、一六六、三五〇

同 八年

六、五二一、〇七六

同 九年

同 十年

以上の如く何れの國に於ても最近に於いて軍事費の節約に大努力を試みてゐるのである。獨り軍事費の支出を尨大ならしめて得たる我國、國力の弱くして軍事費のみ嵩む我國は大に思はなくてはならぬのである。

貧國弱兵

——之を喜ぶ者は一人としてない筈である。

何故の増師賛成ぞ

——尾崎氏の堂々たる態度——

尾崎氏は曾つて二個師團増設の議起るや、氏は大隈内閣の閣員として此師團増設に賛成した事は世人の知る通りである。

師團増設は言ふまでもなく軍備擴張であるのだ。此軍備擴張に賛成したる人が十年を経ざる今日軍備制限を叫ぶは世人をして奇異の感を與へてゐる。

氏は此事に就いて明かに言つてゐる。「二個師團増設に賛成したるは自己の一大過失である」と過失を過失なりとして社會に謝し

二三三

て居る尾崎氏は流石に大政治家の態度である。

尾崎氏は斯う言明してゐる。

予が二個師團増設に賛成したる事は、予の長き政治生活上の大過失であつて、予は過失を過失として天下に謝するのである。予が頭初の二個師團増設に反対したのは、現在に於ける日本と亞米利加とが、海軍擴張に競争すればする程、其國力の相違は、亞米利加の海軍力が強勢となつて日本の海軍力は劣弱のものとなる。それと等しく當時に於ける日本と露西亞との關係は、露西亞の國力も人口も日本より遙かに多くして擴張を競争すればする程露西亞が強勢となり、我國が劣弱となる、即ち二個師團増設を遂行すれば露西亞はそれ以上の陸軍擴張を行ふを以て畢竟するに、

二個師團増設は露西亞に對して國防力を増加するにあらずして却つてそれを弱めるものなるを以て反対したのであつた。

然るに大隈内閣時代には、日本と露西亞との關係は予が、二個師團増設に反対した當時とは大に異なるものあり、同盟條約を結ぶまで良好となつた。假令我國が國防の缺陷を補ふ爲めに二個師團を増設しても、露西亞は我國と競争する事はない、露西亞と比較對照して我國防力の率を弱くする處がない。曩には陸軍擴張を有害無益なりとして反対したのであつたが大隈内閣時代の對露關係より見れば陸軍擴張は無害無益のものたる事が明かとなつた。されど假令無害であつても、益のない軍備擴張に國費を投ずる二個師團増設に賛成する事は不都合であるには相違ないが、我國

今日の政情から云へば、苟くも局に當り、事を閣僚と共にせんとする爲め手を繋いで進み行くのであれば、此程度の妥協交譲は何人も避ける事は出来ないものである。故に予は斯る過失を再び繰返さざる唯一の方法として、今後は専ら立言家として政界に立ち断じて政治の局面には當らないと決心した。そして其決心せる所を天下に公言したのである。

——尾崎氏が二個師團増設に賛成せるは右の如き立場から閣僚と共に圓滿に政治を行はんとしたからであつた。而かも氏はそれを過失なりとなして天下に公言し謝罪してゐる。普通政治家なりせば、二枚舌三枚舌を平然として使用して恬として耻ぢず、若し他よりそれを責めらるゝ事あらば言を左にし右にして以て糊塗

し胡魔化して、過去を瞞晦せんとするのであるが、尾崎氏は他より何等過去を問はれざるに先ち、堂々として、二個師團増設に賛成せるの過失たるを公言し、屢々其過失を天下に謝せるの態度は眞の政治家經世家と謂ふべく、斯の如く眞摯にして誠意溢るゝ人にして初めて軍備制限てふ世界的大問題を論じ得られるのである。尾崎氏が昨年刊行したる其著「憲政の危機」にも此事を明記し以て二個師團増設に賛せるの過失なるを卒直に告白してゐる。

軍備縮少は多年氏の抱ける意圖にして大隈内閣時代偶々二個師團増設に賛成せるは、國防の上は何等害なかりしを以て、閣僚と歩調を一にする關係上より來たれるものである。

氏が軍備制限協定に關し、近來各所に一大獅子吼をなしつゝあ

るを見て、一部に於ては氏が俄かに軍備縮少論者となりたるが如く稱するも、开は誤れるの甚だしきものである。尾崎氏は世界平和の愛好者であるのだ。平和の愛好者たるの故に軍備制限協定を提唱するのである!!。

日、米、英、の海軍力

|| 数字が物語る各國の力 ||

前段に参考資料として日本を始め英米諸強國の國力の對照を掲げたが、更に四大強國の現在海軍力を掲げて参考資料とする。日本現在の海軍力は左の如くである。

戰艦	巡洋戰艦	戰艦	巡洋戰艦	戰艦	巡洋戰艦	戰艦	巡洋戰艦
超勞級	勞級	舊式	超勞級	勞級	舊式	超勞級	勞級
四	四	一	四	一	八	四	一三
〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
二五	六	一〇	二五	六	一〇	二五	六
一	六	一	一	六	一	一	六
一三三	九	二二	一三三	九	二二	一三三	九
〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
五	〇	〇	五	〇	〇	五	〇

外に裝甲巡洋艦十二隻、二等以上巡洋艦四十四隻、驅逐艦十三隻、潜水艦廿五隻
 米英伊三國の海軍力は左の如し

巡戰艦		巡洋艦		航洋		驅逐艦		航洋		潛水艦	
英	米	英	米	日	英	米	日	日	英	米	日
六	〇	六	六	四	五	六	四	二	一	二	三
八	二	八	一	〇	八	一	九	二	一	二	三
二	八	二	四	八	一	九	〇	五	一	二	三
八	二	八	一	〇	八	一	九	二	一	二	三
二	八	二	四	八	一	九	〇	五	一	二	三

二四一

更に大正十年現在と、亞米利加の第一次擴張の完成する大正十二年及び我が八八艦隊計畫の完成する大正十七年に於ける日米英の海軍力を豫想すると左表の通りである。

戰艦		巡洋艦		驅逐艦		潛水艦	
英	米	日	英	米	日	英	米
二二	一七	六	二二	二二	二二	二二	二二
二二	一七	六	二二	二二	二二	二二	二二
二二	一七	六	二二	二二	二二	二二	二二
二二	一七	六	二二	二二	二二	二二	二二
二二	一七	六	二二	二二	二二	二二	二二

大正十年

同十二年

同十七年

二四〇

右の表中戦艦、巡戦艦、巡洋艦は第一期艦齡、驅逐艦は一千噸潜水艦は八百噸以上のもののみを掲記したのである、又大正十二年の部は日本は八八艦隊を故障なく遂行し米國は今後更に擴張せざる豫想を以て計上し英國は目下製艦休止中であり艦齡は漸次盡くるを以て未詳としたのである又大正十六年には日本は八八艦隊を完成し米國は第二次海軍案が成立したものととして計算したのである。此數字に現はれた如く米國にして若し大正十二年から十七年迄我が八八艦隊の完成を見ながら手を懷にせず第二次計畫を樹てたならば我國防力は愈々劣勢となるのである。

數字は斯の如く物語つてゐる。海軍制限協定が如何に急務であ

るかはこの表に依つて見ても明かである。

尾崎氏が寢食を忘れて、各地に軍備制限協定の要を説き、以て國論を喚起して其實現に努めつゝあるは當然である。

加之氏の叫びは波濤を踏えて、世界全土に響應し強き刺戟を與へてゐる殊に米國の前コロネル大學總長にして現上院議員たるドクトル、シャーマン氏は太く尾崎氏の説に共鳴せるものの如く、「大なる軍備の悞るべき結果は國際爭議を解決する唯一の手段が戰である」と云ふ觀念を助成せしめるものである。」とて軍備縮少の要を説くに至つた。

又同國上院議員のキング氏は「米國が海軍擴張にのみ腐心せむか、合衆國は平和の民であるか」將亦た侵略的國民であるかと云

ふ疑ひを全世界の人類に想起せしむべきは當然の歸結であると呼び、更に進んで氏の提案にかゝる軍備縮少案に對し、先頃ポーラ一氏に依つて修正されたる、修正案を攻撃して曰く「吾人のなせる三億九千六百萬圓に對しポラーの十億圓を計上したるは、是戰前米國海軍經費の三倍の豫算に當る。斯る不條理なる事あらむや」と。

更にエオアー選出議員ケニオン氏は論ずらく「近時日米開戦の風評あるも兩國民共に等しく之を想像せざるものである。」と而して氏は暗示して「米國は著名なる人を以て組織したる委員を日本に送り以て日本委員と軍備制限を協定するが可なり」と説いてゐる。

同國のジョン、ヘース、ハモンド氏も「政治學界に於て軍備縮少論を高唱した。曰く「現在の國際關係より見れば、他の列強が同時に武装を解除せざるに當り、獨り米國のみ軍備を制限すると云ふ事は無意味である。然りと雖も教書を作れる米國は、此教書に基いて日英政府に向ひ、卒直に軍備制限を實行すべしと、提議すべきものである。」と結論した。

尾崎氏の提唱は斯の如く其對手國たる米國各階級に偉大なる感激を興へてゐる。

平和の愛好者として知られたる我日本は須らく尾崎氏の提唱に基き、軍備制限協定の實現に努めざる可らず!!。

注 意

尾崎行雄先生は軍備制限協定に關する演說會を開催する毎に、來會者から賛否投票を募つてゐる。本書を讀まるゝ各位に於ても氏の軍備制限協定に對する賛否の如何を明にする爲め各個其欲する儘に「賛否」を記入して（用紙「ハガキ」に限る）東京府下南品川尾崎行雄先生宛御送りを乞ふ。

軍備制限論（終）

大正拾年六月九日印刷
大正拾年六月拾二日發行

軍備制限論

定價壹圓五拾錢

述者 尾崎行雄

編者 内田文廣

發行者 松井榮三郎

東京市神田區錦町三丁目八番地

印刷者 鈴木梅太郎

東京市神田區錦町三丁目六番地

印刷所 榮泉社

東京市神田區松下町七番地

不許複製

發行所 東京市神田區錦町三ノ八番 紀山堂書店

振替口座東京三八〇一二番

572
14

1011 3

終